

18世紀イギリスではピクチャレスク、ロマン主義、ゴシック・リヴァイヴァルの興隆のなかで廃墟への関心が高まり、廃墟崇拜とも呼べる現象が生じた。18世紀は大陸へのグランド・ツアーが盛んとなるが、イギリス人が持ち帰った風景画、特に廃墟画は大きな影響力を有し、これらの絵画に描かれた廃墟を、地所の庭園に点景建築として取り入れることが流行した。イギリスでは16世紀にヘンリー8世により修道院解散が行われ、修道院廃墟が元々多く存在し、18世紀には失われた中世を求める運きから廃墟崇拜とゴシック建築が結びつく。このようななかで、廃墟の(1)「借景」(2)「移築」(3)「人工廃墟」という現象がみられた。(1)は、元々近郊に修道院廃墟が存在した場合、廃墟を「借景」した例であり、(2)は近郊に廃墟がない場合、他の場所から廃墟を「移築」した例である。(3)は近郊に廃墟もなく、移築すべき廃墟もない場合、「人工廃墟」を建造した例である。ここで用いる「人工廃墟」とは、廃墟らしく見える建築をあらたに建造したものである。この人工廃墟こそが、18世紀における廃墟崇拜の最高潮と考えられる。

なかでもジェントルマン建築家サンダーソン・ミラー(Sanderson Miller, 1716-80)はゴシック様式を得意とし、彼の人工廃墟建築は18世紀半ばにおいて大きな流行をみた。本研究では、ミラーが自らの地所で初めて建造した人工廃墟ラドウェイ・カースル(ウォリックシャー)を主な考察対象とする(下図)。ラドウェイの地所は、ピューリタン革命のエッジヒルの戦いで、チャールズ1世の国王軍と議会軍とが初めて合戦した歴史的場所である。この戦場を見渡すことのできるエッジヒルの丘の頂上に、ミラーはこの歴史的イベントを記念してラドウェイ・カースルを建造した。これによりミラーは建築家として名を馳せるようになり、次々と人工廃墟の設計を依頼されるようになったという点で、ラドウェイ・カースルは重要な作例といえる。本研究では、18世紀半ばの廃墟崇拜におけるミラーの役割とこの廃墟の位置づけを明らかにすることを試みる。

これまでゴシック様式の提唱者としては、首相ロバート・ウォルポールの息子であり、宮廷の寵児ホレス・ウォルポールを中心に語られてきた。ウォルポールは、ゴシック小説『オトランド城奇譚』を出版し、ゴシック様式で自邸ストロウベリー・ヒルを建てた。ウォルポールとミラーではゴシック様式におけるアプローチ法において相違がみられ、具体的にはウォルポールは実際の中世建築に範を求めたのに対し、ミラーはバティ・ラングレイのパターン・ブックからデザイン源を求めた。ラングレイは多くの建築書を出版し、彼の建築に関するパターン・ブックは建築様式の伝播に大きな影響を及ぼした。このような両者の相違こそあれ、18世紀半ばにおいてミラーとウォルポールはゴシック様式の双壁と考えられていた。しかしミラーに関しては、一次資料の発見が20世紀後半になるまで遅れたことと、従前のイギリス建築史研究における18世紀のゴシック・リヴァイヴァルの見方から、ウォルポールに比べて極めて研究蓄積が少ない状況にある。そこで本研究ではミラーに焦点をあてることで、18世紀のゴシック・リヴァイヴァルと廃墟崇拜を再考することにより、従前のイギリス建築史研究に新しい方向性を与えようとする試みでもある。

さらに本研究はこれまでの建築史研究に美術、美学、文学、歴史、政治といった側面からもアプローチするものであり、その意味で文化横断的で学際的な研究であり、これまでの建築史研究にあらたな可能性を与えるものである。一次資料としては、ウォリックシャー公文書館にミラーと友人との間に交わされた書簡約1000通、ミラーの日記2冊、会計簿5冊、回想録1冊からなる文献史料と、写真、ドローイング等の視覚史料が所蔵されている。さらにイングリッシュ・ヘリテッジのアーカイヴであるイングリッシュ・モニュメンツ・レコードが所蔵する視覚史料、オックスフォード大学ボードリアン図書館が所蔵する文献史料を用い、筆者がラドウェイで行ったフィールド調査、現在の所有者に行ったヒヤリング調査から、当時の建設経緯を明らかにする。



ラドウェイ・カースル